ケースの分析——保育効果に関する考察 ②

この子どもの言語は前の例と違って器質的な異常をもっていない。家庭でもしゃべることが少ないし、幼稚園でも二学期の半ばまではほとんどはなさない。その後どんどん文章をはなすようになっている。おそらく家庭でも言語が向上しているだろう。この子どもの言語の向上にも幼稚園は一つの役割を果しているとみてよいだろう。この子どもに向けられた母親の関心はこの子にとって重荷になっていたに違いない。よく面倒をみて教育的なようにみえて実際には子どもに圧力になっていて、子どもが自分の能力を出せない場合がある。この記録にみられる排泄の問題もそうだし、言語についても同様のことがいえよう。そしてここで指摘されているように、圧力なしに、たのしめるふんい気の中から、自発的なことばが生れてくるのである。そのような保育と、子どもの経験が、この記録にみるような保育効果を生んでいるといえよう。

話したがらないS君

永井裕子

入園式のすんだ後、砂場の所にいたS君に話しかけた。「ぼくの名前何ていうの？」「——」そばにいたS君のお母さんは、じれったそうにしていたが、「ほら、ぼくのなまえ○○○○でしょ」と答えた。そしてまた「先生、家の子は口たつのが遅くてとても心配したんですよ。今でもあまりしゃべらないので困るんですが、幼稚園に入ったらいくらかでもしゃべるようになるかと思って……。どうぞよろしくお願いします」といった。無口で困ったといっているお母さん、知らず知らずのうちに無口にしてしまったのはお母さんではないだろうか。

入園式の次の日、S君は元気に登園したが一言も話さなかった。その次の日もそうだった。登園したとき私は玄関でS君のくるのを待ち、こちらから「S君おはよう」と声をかけると、うれしそうに、にこっと笑って、ただぺこっと頭を下げて通っていくのだった。そして何か機会をみつけては話しかけるのだが、いっこうに口をひらこうとはしない。二カ月たったある日の朝、いつものように登園してくる子どもを玄関で迎えていると、S君も元気にやって来て「先生おはようございます」と声は低いがていねいにおじぎをして、あいさつをしたのだった。いつもはこちらから声をかけても返事をしてくれなかったのに、今日は自分からいいだしたS君、何か家でよい事があったのかなと思い、注意して一日を過したのだがあとは、やはり何も話さなかった。でも私は、自分から「おはよう」といったS君の顔を思い出し、いつかはきっと自分からいろいろと話しかけるようになるだろうと、その時のことを想像して、あせらずゆっくり機会を待とうと思った。

S君は無口であるばかりでなく、用便に

関しても難点があった。それはこちらから「S君おしっこでしょ」といわないとお便所に行かないのである。これは家でも同様で誰かに「ほらいきなさい」と言われないと、いかないとの事であった。まずこれからなおしていかなければいけない。が、急に幼稚園ではじめても、うまくいかないと思い、家庭とよく話し合った。そして、いくらもじもじしていても自分から行動しようとしないうちは、だまっていることを約束した。またS君には「お便所にいきたくなったら、ひとりでさっさといくのよ」といいきかせた。ある日、私はもじもじしているS君をみつけた。私の顔を見ては何か言いたそうにしているが、私はわざとだまっていた。まだS君はだまって前よりいっそうもじもじさせている。こんなとき「ほらS君！」と言えばすぐ便所にいくだろうとは思ったのだが。そうしているうちにS君はそそうしてしまったのだった。私はただ「S君、おしっこしたくなったら先生に言われなくてもひとりでいくのね。ズボンやパンツがぬれたら、おしりがつめたくなってしまうでしょ。こんどはちゃんとお便所にいってからしてちょうだいね」と言った。このことがあってから、私はS君の家を訪問し、家庭ではどの程度なされているかきいてみると、「先生、どうしてもだめね。誰かが『ほらS君』っていってしまうんですよ。私も忙しくて……」という。お店だからたいへんだろう。でも、こんなことではいつまでたってもだめだからと、これを機会にまたあらためて約束をし、今度はきちんと守ってもらうようにした。

それからしばらくしてまた私はS君のもじもじしているのにあった。「さあ今度はうまくいくかな？」S君は私の顔をみるなり「せんせっ」といったかと思うと、いちもくさんに便所に走っていった。私は「えらいぞS君」と心の中でうれしくなって来た。そしてS君をほめた。それからというものS君は、いきたくなると「先生いってきます」といってからいくようになった。

はじめは朝のあいさつもしなかった子がそして一日中何も話さなかった子が、便所にいくことをおしえるようになったことはたいへんな進歩である。夏休みが終り、たのしい運動会も終った。子ども達みんながとても楽しんで参加した運動会についてのいろいろの話し合いがなされ、思い出の絵もでき上った。この話し合いのとき、S君は「先生、ぼくおもしろかったやー」といかにもうれしそうにいった。「S君、何が一番おもしろかったの？」「あのねーつなひきおもしろかった」「それから？」「あのねー、かけっこおもしろかった」おやS君ちゃんと話せるではないか。「S君、つなひきのどんなところがおもしろかったの？」「うんとね、赤と白とひっぱって、ぼくの赤の方が勝ったんだもん」「ああそうだったね。ぼく一生懸命ひっぱったからでしょ」「うん、ぼくうんとひっぱったんだ」といかにも得々とした顔である。またある時、子ども達の描いた絵を紙芝居のようにして、描いた子どもの解説も加えてお話をはじめた。子ども達は大喜び。自分の描いた絵が出てくると、得意になって説明するのである。その説明がおもしろいといっては笑い、話し方がおもしろいといっては大笑いするのだった。はやく自分の描いた絵が出てこないかなーといった表情で待っている子ども達。S君の番にきた。ちょっと立

ち上がりがにぶったが、私の話に続いて話しはじめた。「これは消防自動車で、今火事になった所を消しにいくところ。ゆっくりはしるとだめだからー」「そうだ。はやく走らないと他の所も燃えてしまうよ」とこれはみている子ども達からの声。「火事は消えたの？」「うん、きえた」「ああよかったな」こうして絵をみながらの話し合いはどんどん進められていった。説明する子ども達にとっても反応があるから話もしやすかったのだろうし、また話したい気分になっていったのだろう。こうして少しずつでも話しはじめたS君。雪の降ったある日、S君登園するなり「先生、うちの〝ねこ〟死んだわ」「あらどうしてなの？」「どうしてだかわかんないけど、よるのうちにわらの中で死んでたの」と元気なさそうに話した。それからその〝ねこ〟のことについて少し話し合った。またある時には「先生、きのうね、ぼくチョコレートとシュークリームとケーキたべたんだよ」「わあよかったね。そんなに食べてお腹大丈夫だったの？」「うん、大丈夫だったよ」と、きわめて簡単な会話ではあるが、話してくれるまでになった。

こうして考えてみると、生れつき無口という子は別として、普通話さない子（話したがらない子）というのは、自分から話し出そうという雰囲気の中にいないからではないだろうか。どうしても話さずにおれなくなるような雰囲気を私共がつくってやらないからではないだろうか、と反省させられた。と同時に家庭にあっては、子どもが話すべきことまでも親が話してしまわないように気をつけ、少しずつでも子どもの独立心を養っていくようにしていったらよいと思う。

（仙　台）

めだかずいひつ

M子のわがまま、Y子のわがまま

うすき　たほ

帰る仕度をして腰かけている子ども達と当番の引きつぎをしている時である。ランドセルを背負ったまま窓からのぞいていたM子が、「先生」と呼びかけた。子ども達がその声に気をとられたので早速部屋にいれて座席を与えた。そして黒板にM子の名前を書かせて紹介したり、一年生の本を読んでもらったりした。M子は先輩顔で、皆の視線を浴びながら模範的態度でのぞんでいる。子ども達の間からは「上手ね」とつぶやきがもれる。

このM子は、年少組から二年間、殊に年少組の時の私のメモノートに一番たくさん問題行動を記録された当事者なのである。お弁当はいつも残す。忘れものはあたりまえ。入園当初は気に入らぬことがあると黙って帰ってしまい、友達との遊びは全然できない。すぐ、かっとなって友達をつねったり、打ったりするかと思うと、集りの時はぐずぐずして一番遅い。遠足の時男の子と手をつなぐ事は絶対にいやといって困らせる。また人の遊んでいる物を平気で取り上げ、ジャンケンで負けてもゆずらない。がまんするということもできなかった。とにかく大げさにいえば、わがままの権化のようであった。

M子の家庭は、若い男の使用人が多く、